

東西均記稿（二） 東西均記・拡信

明人 方以智 著
齊藤 正高 訳

東西均記解題

「東西均記」（以下「均記」）は、安徽省立博物館に所蔵されている抄本、『東西均上』（第二冊）に冠せられている。内容は概ね鳴鳴子と何何先生が登場する莊子風の寓話である。末尾にかい句（「歲陽玄墨、執除支連」）によって、この文が書かれた年が一六五二年と分かり、『東西均』全体の「序」と見なすことができる。

鳴鳴子と何何先生は方以智（一六一一～一六七二）の創作にかかる人物である。鳴鳴子は「均記」にしか登場しないが、何何先生は「何何氏」という表記で別の篇にも登場する。その篇ごとの登場回数を示すと、擴信1回、三微3回、盡心2回、反因1回、公符1回、不立文字2回、容遁1回、名教4回である。「何何氏」によって語られる内容は、「擴信之密訣」であり、『荀子』や禪語録の言葉であり、夢に「五青衣」（廬山五老峰の精）と

話したりと様々である。

「均記」には、何何先生に四十年間つかえた鳴鳴子が、二十年前ぶりに先生の言葉を聞き、何かを悟り「昨日之我」でなくなつたこと、そして翌朝、先生がどこかに消えたことが書かれている。ここの「四十年」は龐樸氏も指摘するように、方以智が「東西均記」を書いた年齢、つまり四十二歳（数え年）と関係があると思われる。方以智の著作のうち、「哲学エッセイ」とよばれる『東西均』は、百科全書的である『物理小識』や『爾雅』を意識して書かれた『通雅』とあきらかに著述スタイルが異なる。鳴鳴子と何何氏の語り手は、方以智自身のこの心境の変化を象徴的に語るためのしかけであろう。

鳴鳴子の心境の変化は、以下の言葉を聞いた後に起こる。

斯の世は備世なり。語れば則ち語に備われ、語らざれば

則ち黙に備むかわれる。惟だ其の適ゆく所、偷ひそかに以て自ら匿かくし、
 猥者は黙を匿かくし、黙者は語を匿かくすも、自ら真語あり。語は
 終つひに以て匿かくす可らず。黙又た何ぞ匿かくす可けんや。黙を以て
 語を均ならし、語を以て黙を均ならす。汝其れ之を均ならせ。

(東西均記解題、了)

ここでは、言語から逃られぬことが確認され、言語と沈黙の調和がめざされている。方以智が四十歳以後、構築しようとした学問の姿も、何何先生が言うように、言語を基盤にしつつも、言語を超えた「真語」の把握をめざす学問だと考えられる。ところで、『物理小識』や『通雅』は「東西均記」の執筆時にまだ稿本の段階であり、編修を終えていない。蒋国保氏の研究によれば『物理小識』の編修を終えるのが一六六四年の冬である。また、冒懐辛氏の指摘によれば、『通雅』には自序より後に追加された部分があり、すくなくとも一六五六年と分かる書込がある。つまり、方以智は「東西均記」を書いたあとにそれ以前に書きためた『物理小識』や『通雅』の稿本を追補しているのである。したがって、『東西均』と『物理小識』『通雅』の著述スタイルの差異をそのまま唯物論から唯心論への転向を示すとする哲学史上の素描は再検討を迫られる。

『東西均』の本文には、『通雅』や『物理小識』と共通する部分も少なからず指摘できる。確かに鳴鶴子が語るような変化はあつたであろうが、方以智は四十歳以前の『通雅』や『物理小識』の立場を完全に放棄したのではなく、それらの稿本に手を

入れ精密を期しながら、いわば、前期の言語学的蓄積の上に、『東西均』に示されるそれを超える新たな学問を構築しようとしていたのである。

参考文献

- ・冒懐辛『通雅校點説明』一九八二年(侯外廬主編『方以智全書』上海古籍出版一九八八年、第一冊所収)
- ・蒋国保『『物理小識』著作考』(蒋国保『方以智哲学思想研究』安徽人民出版社一九八七年)
- ・方立天『中国古代哲学問題發展史』中華書局一九九〇年、一〇九頁

翻訳の方針

- 一、訳文には常用漢字、原文には繁体字を用いる。
- 二、底本は龐樸『東西均注釋』中華書局二〇〇一年を用い、『東西均』中華書局一九六二年を適宜参照した。
- 三、難解な部分には訳文に「」に言葉を補った。
- 四、底本の段落に従い、番号を付けた。
- 五、方以智の原注については()で括った。

東西均記

一

嗚囀きさき子は何何先生に四十数年のあいだ師事した。「先生は」数万巻の書物を読み、ほとんど一字として地上に知らぬことはない人であった。じつと隠れたものを観て、鐘を叩いて世に知らせ、素朴で無知、すこしも理屈を立てず、一つの法に合わさぬ人であった。南北で危険な目にあり、しばしば白刃をふみ、死を鼻先に見ても、顔色を変えず、心はこれにうちかかってきた。これは毛を吹けば断ち切る研ぎたての刃、それを空中に放り投なげる弄丸きまぐげいのなかに暮らしてきた人といえよう。

【原文】嗚囀子事何何先生、四十餘年。讀書數萬卷、而無一字殆地上無所不知者乎。徐觀其隱、敏其鐘、其空空無知、不立一塵、不合一法者乎。跳北跼南、數履禮禮之刃、視死如鼻端、色不少變、心更折之、此其吹毛發礪、弄丸中隨者乎。

【注釈】○嗚囀、口が歪よこんでいる様子。「嗚口不正也」(『文選』劉峻「辨命論」李善注所引「通俗文」) ○四十餘年、方以智のこのときの年齢、四十二歳を指す。○禮禮、「白刃禮禮、矛戟交錯」(『文選』第三十四卷、枚乘「七發」) ○空空、「空空乎其不為巧故也」(『呂氏春秋』慎大覽、下賢) ○吹毛發礪、「今臣之刀十九年矣、所解數千牛矣、而刀刃若新發於礪」(『莊子』養生主) ○弄丸、所謂「juggling」のこと。「今有弄七丸、二常在手、

五常在空中、或置鼓其下者、殊為絕技」(『通雅』卷之三十五)とあり、もとは『莊子』徐無鬼にも見える。『東西均』においては「禮也、體也、理也、弄丸之一也」(全偏)と循環して一体をなしているものの喩えに用いられている。

二

二十年来、「先生は」人と語らなかつたが、不意に私と語つた。それはみな、太古の聖人、伏羲・軒轅も見なかつたことである。先生は「この世は備やとの世である。語れば語ことばに備やとわれ、語らなければ沈黙やとに備やとわれる。ただこの世に処あしていくのに、それと知らずに自ら匿かくしているだけだ。卑しい者は沈黙を匿かくし、黙る者は語を匿かくすが、「その匿かくすところに」おのずから真の語ことばがある。語ことばはついに匿かくすることができない。沈黙ことばならなおさらどうして匿かくすることができよう。沈黙ことばで語ことばを均ならし、語ことばで沈黙ことばを均ならすのだ。おまえはこれを均ならせ」とおっしゃつた。「これを」夜に聞いてその語ことばを黙ことばり、その沈黙を語ると、私は昨日の私ではなくなつた。何何先生は「何」によつて私を化したのだろうか。

【原文】二十年来従不與人語、忽與我語、皆羲軒之所未見、先生曰、斯世備世也、語則備於語、不語則備於默、惟其所適、偷以自匿、猥者匿默、默者匿語、自有真語、語終不可以匿、默又何可匿耶、以默均語、以語均默、汝其均之、夜聞而默其語、語其默、我非昨日之我、此何何先生之以何化我也。

【注釈】○羲軒、「考羲軒於往統、肇承天而理物、訊炎昊於前辟、

爰制地而疏疆」(『晉書』列傳、四夷)

三

朝はやく起きて先生の所に行つたが、ついに居場所が分からなかつた。これはいわゆる「雲氣に乗り、日月を駆り、八極を揮斥さすい、無窮に遊ぶ」ものであろう。どうしためぐり合わせで先生と会い、そしてまたどうして今日会えなかつたのか。とうとうどの人かも分からなかつた。四十年、昨日までの私ほどうして尋ねなかつたのか。愚かにもほどがある。何何先生の「何」が無く、「何」が有るのか、その叱責の声、その歌声も、私は知らなかつた。ただ、嗚嗚ききと口を歪めるだけだ。この沈黙によつて先生の沈黙と語ことばを記そう。副本は決鼻行者がこれを写した。

【原文】晨起適先生所、竟不知所在、是所謂乘雲氣、騎日月、揮斥八極以遊無窮者乎、何幸見之、而又何以不見、遂不知其何許人、四十年昨日之我何以不問、愚亦不可及矣。其無何邪、其何有邪、其呵呵邪、其烏烏邪、我不能知、惟有嗚嗚而已、因默記其所默語、副決鼻行者抄之。

【注釈】○乗雲氣、「乘雲氣、騎日月而遊乎四海之外」(『莊子』齊物論) ○揮斥八極、「揮斥八極、神氣不變」(『莊子』田子方) ○遊無窮、「知遊心於無窮、而反在通達之國、若存若亡乎」(『莊子』則陽) ○呵呵、叱責の声 ○烏烏、歌声を指す。○決鼻行者、決鼻は月の兎のこと。行者は仏道修行者をさす。方以智は寛浪

道盛の弟子としては「行者」を自称とし、また拈信篇の前には「決鼻行者」の署名がある。「月魄謂之決鼻、乾鑿度曰、月八日成光、穴鼻始明、注、穴決也、決鼻兎也。緯書為漢人所造、則漢時方語、必有以月魄為穴鼻者」(『通雅』卷之十一、天文・釈天)

四

告たまげていう、「魂魄相い望み、夜半に天を瞻みれば、旁死みかづきあり中生たちまちつきあり。その円を必さず。似たる者は何人ぞ。師なく自ら然り。ここに自ら知る。古えの白の相い伝いわるを。」歳陽は玄墨「壬」、執除「辰」の支連じゅうじ、嗚嗚きき子が識しし、五老峰に顛す。

【原文】諍曰、魂魄相望、夜半瞻天、旁死中生、不必其圓、似者何人、無師自然、於此自知、古白相傳、歲陽玄墨、執除支連、嗚嗚子識、五老峰顛、

【注釈】○諍曰、「李奇曰諍告也、張晏曰諍離騷下章亂也、師古曰諍音碎」(『漢書』賈誼傳注) ○魂魄相望、龐樸氏は以下八句が字謎になつており、「明人方以智」の五字を隠していると考える。ここは「日月魂魄之率也」(所以)を根拠に、「魂魄相望」の「魂魄」部分に「明」の字が隠されているとする(『東西均注釋』序言3頁)。○夜半瞻天、夜中に天をみると天の上がみえない。つまり天字の上がない「人」が隠されている(同前)。○旁死中生、旁死も中生も月齢を表す。龐樸氏は旁字のすみが生に中が生きるつまり「方」を隠すとす。(同前)

- 不必其圓、円ではないので、これも「方」を隠す。(同前)
 ○似者何人、似字の人の隣には「以」がある。(同前) ○於此
 自知、大冢の「智」は自と知に従う。(同前) ○歳陽、十千の
 こと○玄墨、「大歳在甲日闕逢、在壬日玄默」(『爾雅』釋天)
 ○執除、「大歳在寅日攝提格(中略)在辰日執徐」(『爾雅』釋天)
 ○支連、不詳、十二支のこと。○五老峰、廬山の峰のひとつ。
 (東西均記、終)

拡信解題

「拡信」は『東西均』の緒論である。その基調は「信を拡げよ」ということであり、冒頭から巨大生物や不燃性の繊維、石油や氷山など、世界の不思議に目を開くべきことを述べている。方以智はこれらの驚きにみちた「実事」には、その背後に「実理」があると述べる。これらの「実理」においては、南半球の星座の発見や、黄河・長江の源流探索の例に見られるように、古代の「前理」を後世の「後理」が「精明」にできると述べる。

そして、彼は本題である「虚理」を明らかにしようとする。この「虚理」には、儒仏道の三教がそれぞれ掲げる様々な「理」がふくまれる。方以智はこれらのあらゆる教義概念が「方言」であると喝破し、地方や時代によって異なる「茶」の名称をメタファーに用い、対立するかにみえるそれぞれの教義概念が、実は一つであると述べる。

この概念の融合は、「天地を以て自然の公と信じ、自心を以て東西の同と信ず」というように、「天地」と「自心」に究極の根拠を求め、ついに、「孔子復た生ずれば、必ず老子の龍を以て佛に予え、佛中國に入れば、必ず孔子の書を讀むを喜ばん」と歴史的存在として聖人を相対化する。

また、方以智は『東西均』のほかの箇所でも、「信」が拡大された究極の姿を以下のように表現する。

人大いに疑わざれば、豈に能く大いに信ぜん。然るに先ず信ぜずんば、又た安ぞ能く疑わん。疑いの疑わざるに至り、信の信ぜざるに至れば、則ち信の至りなり。(疑信)

この文は「信ずるべきを信ずるは信なり。疑うべきを疑うも亦た信なり」(『荀子』非十二子)という言葉をふまえているが、方以智の「信」は、その極限がもはや「信ずる」という能動すら必要ではないという点に特徴がある。この究極の信の状態は、手が心のままに動く様子に譬えられる。つまり、信ぜられる対象(≡手)と信ずる主体(≡心)が間隙なく相即する身体的融合こそ、方以智がめざす「信」の究極なのである。

このような身体的相即の「信」をめざす「拡信」のまえには、あるゆる教説が主張する様々な「理」はつきつぎと相対化され、根拠としての權威を失う。最後に残るのは「天地」と「自心」のみである。この過程は「理」の融合であるとともに、「心」

が信の媒介であった「理」からの自由の獲得する過程でもある。『東西均』のなかで、この「拡信」がきわめて方法的関心をもつて論じられている点は注意すべきである。それは、完全性の概念としての「神」がすべてを肯定してくれる見通しがあるがゆえに、すべてを「疑う」ことで、根拠の再構築をはかったヨーロッパの同時代の哲学者、デカルト（二五九六～一六五〇）と好対照をなしているのである。

（拡信解題、了）

拡信

決鼻行者抄

一

拘こたわる者は自らの見るところを守り、目前になければ、あれこれいって信じない。子休そうじの言葉は大きく、乾毒いんどの言葉はさらに大きい。大きいとは寓言たとえばなしのことである。いまだかつて寓言たとえばなしでなければ、人が天地の間の大きさを信じたことがないとするならば、まちがいである。わたしは寓言たとえばなしによらず、実によつて徴あやそうと思う。

【原文】拘者守所見、不在目前、則憂憂乎不信、子休言大、乾毒之言更大、大者寓也、未嘗非寓而人竟不信天地間之大、則非

也、愚不寓言、請以實徵。

【注釈】○憂憂、「惟陳言之務去、憂憂乎其難哉」（韓愈『答李翊書』）○子休、「莊子字子休、見列子注、成玄英疏」（『通雅』卷之二十、姓名）○寓言、「寓寄也、以人不信己、故託之他人、十言而九見信也」（『莊子』寓言、『經典釋文』）

二

山中の老いた農夫に魚が木より大きいと語れば、すぐに疑う。さらに、帆柱ひげのような須ひげの蝦、帆のような翅はねの蝶、山のように百里もある鰲あつほん、衣服を野の虫が吐くと言え、すぐに疑う。しかも、鎖鎖さきや石絨せきじゆうなど火中に投げ入れると清潔になる布、西域の羊を種うゑる話、斗榭ますのような桃の核たね、火をふく井戸、石油、海にうかぶ氷、銀を溶かす水など「の不思議」もあるのだ。「このような物事は」估畢とくしよじん者でも十中八九はあやしむ。その他の「書物を読まぬ」者ならなおさらである。変化というのはきわまりがない。事には変化があつて、いつもその事であるとは限らない。しかし、理はいつもその理である。人の心が及ぶべき所はすべて、みな理がある所である。それでも心が及ばない所がある。人はまずその心さえ自ら見ることはできない。だから語ことばが事物に及ぶ・及ばないというのは虚しいことだ。

【原文】語山中之老農魚大於木、即疑、而且有蝦須如檣、蝶翅如帆、鰲背如山長百里者、言衣爲野蟲所吐、即疑、而且有鎖鎖石絨、投之火中愈潔者、西域種羊、桃核如斗、井火、石油、海

氷、礪水、佔畢者十且八九詫、況其他乎、變變而化化也、事不必其事、理則其理矣、凡人心之所可及者、皆理所有也、且有不及者、人先不能自見其心、而語及不及者妄也。

【注釈】○鎖鎖、「回紇野馬川有木曰鎖鎖、燒之其火經年不滅、且不作灰。彼處婦女取根製帽、入火不焚、如火風布云」(元・陶宗儀『輟耕錄』卷二十三) ○石絨、「冬十月辛酉、制國用司言、別怯赤山石絨織為布、火不能然。詔采之」(『元史』世祖) ○種羊、「漠北種羊角、能產羊、其大如兔、食之肥美」(陶宗儀『輟耕錄』) ○桃核如斗、「積石之桃、大如斗斛器」(李時珍『本草綱目』卷二十九「桃」所引「玄中記」) ○井火、「有天封苑火井祠、火從地出也」(『漢書』地理志、西河郡鴻門注) ○石油、「鄜延境內有石油、舊說高奴縣出脂水即此也」(沈括『夢溪筆談』卷二十四) ○海冰、「又北有骨師國、骨利幹都播二部落北有小海冰、堅時馬行」(『新唐書』卷四十三下) ○礪水、「有礪水者、剪銀塊投之、則旋而為水、傾之盂中、隨形而定、復取礪水掃瓶。」(『物理小識』卷之七) 方以智は礪水について「道末」即ち湯若望(イエズス会士、アダム・シャール)から聞いている。○佔畢、書物を読むこと。「今之教者、呻其佔畢」(『禮記』學記)

三

漢は張騫をつかわし、唐は西域を平定したが、黄河の源は分からなかった。後の『元志』をみると、闊闢がはじめて黄河を朶甘思にまで遡った。長江の源は古くは茂州汶山にまでとさ

れ、馬湖江が金沙江に遡るのを知らなかった。『緬甸志』にはじめて長江を吐蕃の犁石にまで遡り、千古の昔からある長江と黄河の真源は始めてあきらかになった。『禹貢』は黄河を積石からとし、長江を岷からとしているので、半分で切りすていたのだ。『禹貢』を信じて『元志』を信じないのは、「織女の機はたおろきを支える石」のような奇譚の方を信じて、黄姑や牽牛が、方言では即ち「河鼓」であるという事実を信じないのと、どうして異なろうか。

【原文】漢使張騫、唐平西域、河源終未明、後覽元志、闊闢乃泝河於朶甘思、江源止詳茂州汶山、而不知馬湖江泝金沙江、緬甸志乃泝江於吐蕃之犁石、則千古江河之真源始顯、禹貢導河自積石、江自岷、則半路截之耳、必信禹貢、不信元志、又何異信織女支機石而不信黃姑牽牛即河鼓耶。

【注釈】○張騫、「今自張騫使大夏之後也、窮河源、惡略本紀所謂崑崙者乎」(『史記』大宛列傳) ○元志、「至元十七年、命都實為招討使、佩金虎符、往求河源、(中略)其後翰林學士潘昂霄從都實之弟闊闢出得其說、撰為河源志」(『元史』地理志河源附錄) ○汶山、「首大江出汶山」(『山海經』海內東經) ○馬湖江、「繩水又馨逕越犍郡之馬湖縣、謂之馬湖江」(『水經注』卷三十六) ○金沙江、「麗江路軍民宣撫司、路因江為名、謂金沙江出沙金故云、源出吐蕃界」(『元史』地理志四) ○禹貢、「浮于積石、至于龍門西河會于渭汭」(『尚書』禹貢) ○織女支機石、「舊説云天河與海通、近世有居海者年年八月有浮槎去來

(中略)牽牛人乃驚問曰何由至此(中略)乃與一石、而歸後至蜀問嚴君平、君平曰此織女支機石也、某年月日有客星犯牽牛宿、正此人到天河時也」(『太平御覽』卷八所引『博物志』)○黃姑牽牛、「牽牛星荊州呼為河鼓(中略)河鼓黃姑牽牛也、皆語之轉」(梁・宗懷『荊楚歲時記』)

四

張衡が地儀を作り、祖暅之が『綴術』を作ったので、義氏・和氏・洛下閎の曆法は精密ではなくなつた。「元の」呉澄は九層「からなる天の本体」を説き、耶蘇イエズス「会土」は南半球の星図を合わせた。それによれば、マラッカから見える星は、井「双子座」狼「大犬座」・箕「蠍座」尾「射手座」に接している。これは開闢以來なかつたことであり、天象は今日に至つて始めて完全となつたのだ。「唐の僧」一行が「山河兩戒」を唱えてから、千年あまりこの説を尊んできたが、どうして夢を説いていたと分るうか。『韓非子』に「地形の漸いよいよ往くを以て、人をして東西面するを易かえ、自ら知らざらしむ」という。つまり、処る場所によつて誤りが生ずるのである。新しい円周率によつて、中国の申の時を測れば、ヨーロッパは子の時にあたる。つまり、中国という足のふむ所には、必ずこの足がふむ底があるのだ。蟻が屋根の梁を歩くようなものである。赤道せきどうの下には、二度の春秋がある。銀河は細星があつたものである。北方では羊の脚せうまつを煮ている間に、短い夜が明ける。さらに北へい

ば、太陽の没まない国があるという。「インドの占星術」『都利聿斯』は人の禍福をいい、郭璞の『青囊書』は「葬は生氣に乗る」という。これらはみな先王が詳しく説いた所ではない。だから、どうして響きのように呼応しようか。食い違つて当然なのだ。木綿もめん・抄紙かみす・雕板いんざう・摺扇せんすはみな後代にそなわつたものであり、後人が前人より精密と明晰を加えた所であるから、後出の理については誣しいて「先王の法言ではない」としりぞけるべきではないのだ。

【原文】張平子作地儀、祖暅之作綴術、則羲和洛下疎矣、吳草廬説九層耶蘇合圖、滿刺加諸星接井狼與箕尾、爲開闢所未有、是天象至今日始全、一行山河兩戒、千餘年尊奉之、豈知說夢哉、韓非曰、地形以漸往、使人東西易面而不自知。新率測中國申時、歐邏巴方子時、則中國足之所履、必有足履此足之底者、如蟻之行屋梁是也。赤道之下、兩度春秋、河漢之明乃屬細星、北方有煮羊脾而天明者、從此再轉、則有日光不沒之國、都利聿斯言人禍福、郭璞青囊葬乘生氣、皆非先王所詳、何廼應之如響、木綿抄紙雕板摺扇俱備於後代、是後人有增加精明於前人者、則後出之理未可誣以爲非先王之法言也。

【注釈】○張平子、後漢の天文家張衡(七二～一三九)のこと。著述に『靈憲』などがある。「渾天儀」および「候風地動儀」を作成した(『漢書』卷五十九)。○祖暅之、南朝梁の人、父冲之の後をつぎ大明曆を五一〇年に頒布した。『綴術』は散逸したが、円周率の計算に関するものと推定されている(藪内清「中

国の数学』岩波新書、五〇頁)。○義和、「乃命義和、欽若昊天
 歴象日月星辰、敬授人時」(『尚書』堯典)○洛下、「歴數則唐
 都洛下閔」(『漢書』卷五十八公孫弘)○吳草廬、「吳草廬澄初
 論天之體實九層、至利西江入中國而暢言之」(『通雅』卷十一)。
 ○耶蘇合圖、「明末赤道南北兩總星圖」を指す。この図は徐光
 啓の跋と湯若望の図説をのせる。○井狼箕尾、それぞれ双子座・
 大犬座のシリウス・蠍座・射手座を指す。どれも銀河にかかる
 星であるから、銀河が南半球まで続いていることを言う。○一
 行、「僧一行姓張氏先名遂」(『舊唐書』卷一百九十二)「一行以
 為天下山河之象存乎兩戒。」(王應麟『玉海』卷二十)○韓非曰、
 「夫人臣之侵其主也、如地形焉、即漸以往、使人主失端、東西
 易面而不自知」(『韓非子』有度)○新率、円周率の比較的精密
 な値のこと。「古之九數、圓周率三、圓徑率一、其術疏舛、自
 劉歆、張衡、劉徽、王蕃、皮延宗之徒、各設新率」(『隋書』律
 曆志)○煮羊脾、「骨利幹於鐵勒諸部為最遠、晝長夜短、日沒後
 天色正曠、煮羊脾適熟、日已復出矣。」(『資治通鑑』唐紀、太
 宗二十一年)○都利聿斯、「都利聿斯經二卷」(『新唐書』卷五
 十九)注に「貞元中都利術士李彌乾、傳自西天竺、有璩公者譯
 其文」とある。○郭璞青囊、郭璞(二七六〜三二四)は晋代の
 卜筮家、『爾雅』に注をつけたとされる。青囊は『晉書』郭璞
 傳に「青囊中書九卷」と表れており、郭公という人物から託さ
 れた書物であるが、ここでは「葬者乘生氣也、五行行乎地中、
 發而生乎萬物」で始まる風水書、『葬經』を指す。○木綿、「鄧

潛谷曰、元入中國非也。禹貢已著卉服、梁武帝用木綿帳、唐有
 木綿詩」(『物理小識』卷之六、綿花布類)○抄紙、紙すきのこ
 と。「治楮者漚之、投黃葵之根、則釋而爲淖糜、酌諸槽、抄之
 以簾、其薄者一再抄、厚至五六抄」(『物理小識』卷之八、抄紙
 法)○雕板、木版による印刷術のこと。「辛未、中書奏請依石
 經文字刻九經印板、從之」(『舊五代史』唐書、明宗本紀)○摺
 扇、扇子のこと。「摺疊扇、貢于東夷、永樂間盛行」(中略 智按
 孫愐韻注摺扇則唐人已有矣」(『物理小識』卷之八、宮扇類)
 ○法言、「非先王之法服不敢服、非先王之法言不敢道」(『孝經』
 卿大夫章)

五

古い譬えに「人体の三百六十の骨節には、三万六千の尸蟲が
 いて、それぞれに昼夜・山河・親族・郷党があり、人が三千大
 世界に処するように一骨節に処している」という。「この譬え
 については」まだ信じない人もいるかもしれない。さきに吾は、
 実事によって実理をあきらかにし、後理によって前理をあきら
 かにした。「これについて」すつきりと信じられない者はいな
 いだろう。これを信するなら、これらの虚喩が虚理をあきらか
 にするのも、またどうして信じられないのだろう。弄丸まよひのなか
 を往来する者は、何が因果かは問わずに輪廻が自らあることを
 聴ゆるすしかない。「これを」信じられるだろうか。「そうしてこそ、
 これから言うことに」参まじわることができなのだ。

【原文】舊喻、人身三百六十骨節中、三萬六千尸蟲族焉、皆有晝夜山河親黨而人處大千如一骨節、人或未能信、乃者吾以實事徵實理、以後理徵前理、有不爽然信者乎、信之矣、則此等之虛喻徵虛理、又何不可信耶、弄丸問往來者、因果可以不問、而輪迴聽其自有、信得及否、可以參矣。

【注釈】○舊喻、「比丘、一人身中骨有三百六十、毛孔九萬九千、脈有五百、筋有五百、虫八萬戶。比丘當知、六入之身有如是災變。比丘、當念思惟、如是之患、誰作此骨、誰合此筋脈、誰造此八萬戶虫。」(『增壹阿含經』六重品卷第三十) ○乃者、「さきに」の意味。○信得及否、「先生謂諸生曰、汝信得及否、諸生對曰信得、先生曰、這箇心是人人都有的、是人人都做得堯舜的」(『明儒學案』卷十六、江右王門學案一所引『聚所先生語錄』)、聚所先生は鄒守益の孫、鄒德涵を指す。

六

『爾雅』の「檣」は、古えはこれを「茶」といい、西域では「陀」といい、また「擇」といい、吳では「挫」といい、閩では「徳」といい、中原では「茶」という。これらはみな一つの物であり、方言や時代によって異なるだけなのだ。(原注、古代には家麻韻がなかった。だから『漢書』の「茶陵」は「茶陵」であり、『華嚴』の陀字は『大品般若經』に「茶」に作り、「觀經」に「擇」に作る。「曼陀羅」は「曼荼羅」につくる。これらが証拠である。)「太極」、「精一」、「時中」、「混成」、「環中」、「真

如」、「円相」などは、みな「一心」であり、「一宗」である。時によって教えの施しかたが異なるだけなのだ。それぞれに方言があり、それぞれに書物を記し、それぞれに稱謂がある。こちらではこの稱謂を尊び、あちらではあの稱謂を尊ぶ。その信ずる所を信じ、信じない所を信じないのであれば、天地に本来この稱謂などなく、我によってこれに稱謂をつけるだけだと、なぜ信じないのか。天地に本来「法」などなく、我によって空を画して「法」を出すだけだと、なぜ信じないのだろうか。

【原文】爾雅之檣、古謂之茶、西域謂之陀、亦謂之擇、吳謂之挫、閩謂之徳、中原謂之茶、是皆一物也、方言時變異耳、(古無家麻韻、漢書茶陵即今茶陵、華嚴陀字、大品般若作茶、觀經作擇、曼陀羅作曼荼羅、可證。)太極也、精一也、時中也、混成也、環中也、真如也、圓相也、皆一心也、皆一宗也、因時設施異耳、各有方言、各記成書、各有稱謂、此尊此之稱謂、彼尊彼之稱謂、各信其所信、不信其所不信、則何不信天地本無此稱謂、而可以自我稱謂之耶、何不信天地本無法、而可以自我憑空一畫畫出耶。

【注釈】○爾雅之檣、「檣苦茶」(『爾雅』釋木) ○漢書茶陵、『漢書』地理志、「長沙國」の部分にみえる。○太極、「易有太極、是生兩儀」(『周易』繫辭上) ○精一、「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」(『尚書』大禹謨) ○時中、「君子之中庸也、君子而時中」(『中庸』) ○混成、「有物混成、先天地生」(『老子』第二十五章) ○環中、「果且有彼是乎哉、果且無彼是乎哉、彼是莫得其偶、謂之道樞、樞始得其環中、以應無窮」(『莊子』齊

物論 ○真如、「究竟平等永無變異不可破壞、唯是一心説名真如以真如故從本已來不可言説不可分別、一切言説唯假非實」(馬鳴『大乘起信論』上) ○圓相、「舉、南泉歸宗麻谷、同去禮拜忠國師、至中路、南泉於地上、畫一圓相云、道得即去、歸宗於圓相中坐、麻谷便作女人拜、泉云、恁麼則不去也、歸宗云。是什麼心行」(『碧巖録』卷七)

七

推して穿鑿し、推して補う。分けて推して「専門」とし、合わせ推して「大宗」とする。これが代錯不息の道である。古えの茶には「茗」「葢」「薺」の三つの名があつたが、後の「臘面」「京挺」に及ばず、また「石乳」「密雲龍」に及ばず、「亞鬪」「烏蒂」にも及ばない。今の「六貢」「源羅」などは最高の茶だとされているが、はたして誰がその上をゆく「芥」という茶を知り、さらに「芥」にも「片」があるのを知っているだろうか。「鴻濛之心料」は「爾雅」の「檟」のように素朴であるが、孔子のように集大成であれば「六貢」「石乳」「浮梁」がそなわる。すぐに入ると「源羅」であり、色に鮮やかさが加わり、「太素」になると芬に鮮烈さが加わる。「最上の茶はこのように」沖和に反する。だから中冷や恵山の泉でなければ、どうしてその才を尽くすことができよう。さらに尼山・鷲峰・苦・蒙・嵩少の製「する茶」を合わせ、粗ければこれを焙り熏し、精であればこれを析ぎ片め、「このように茶に工夫を凝らしな

がら、なお質素に」谷の水を白湯で飲むのもやめない者はいるだろうか。「そのような者なら」その時時によって物事の変化をきわめ尽くし、何事も心からそうだと思わなければ、どんな故も信じないのだ。

【原文】相推而鑿、相推而補、分推之爲専門、合推之爲大宗、代錯不息之道也、古者三茗葢薺、非如後之臘面京挺也、非如後之石乳密雲龍也、非如後之亞鬪烏蒂也、今若六貢、若源羅、至矣、孰知有芥、芥又有片乎、鴻濛之心料猶檟也、集大成則貢乳浮梁俱備矣、直指入則源羅矣、色且加鮮、至若太素、芥且加烈、反于沖和、然非中冷恵山之泉、烏能盡其才若此者哉、孰知又有合尼山鷲峰苦蒙嵩少之製、而粗則焙之熏之、精則析之片之、不廢燻湯飲谷者乎、因時盡變、何事不然、何故不信。

【注釈】○茗葢薺「其名一曰茶、二曰檟、三曰葢、四曰茗、五曰薺」(陸羽『茶經』)「早采者爲茶、晚取者爲茗、一名薺」(『爾雅』釋木「檟苦茶」郭璞注) ○臘面京挺、茶名「至南唐初造研膏、繼造蠟面、又佳者號京挺」(『通雅』卷三十九「茶飲之妙古不如今」) ○石乳、茶名「宋初置龍鳳模、號石乳」(同前) ○密雲龍、茶名「神宗時復製密雲龍、即東坡供佳客者」(同前) 又「自熙寧後、始貢密雲龍」(清・陸廷燦『續茶經』卷之上所引、宋・周輝『清波雜志』) ○亞鬪、茶名「茶之精絶者曰鬪、曰亞鬪」(宋・黃儒『品茶要録』白合盜葉 ○烏蒂、茶名「建茶嫩者曰烏蒂曰白合」(『通雅』卷三十九「茶飲之妙古不如今」所引、宋・姚寬『西溪叢話』) ○六貢、茶名「六安貢尖、多致者不一二掬」(『通

雅』卷三十九「茶飲之妙古不如今」○源蘿、茶名。不詳。○芥茶名「宜興老廟後之芥片、豈非第一乎」（『通雅』卷三十九「茶飲之妙古不如今」）○片、「茶有二類曰片茶曰散茶。片茶蒸造、實椀摸中串之」（『宋史』食貨志、茶）○鴻濛、「貫瀕濛以東竭兮」（『楚辭』遠遊）「瀕濛、氣也。竭去也。瀕一作鴻」（同上、王逸注）、又、「晦朔之間、合符行中、混沌鴻濛、牝牡相從」（『周易參同契』晦朔合符章）○集大成、「孔子、聖之時者也、孔子之謂集大成」（『孟子』萬章下）○中冷、泉名「夫中冷天下第一泉也」（明・王世貞『弇州四部稿』續稿卷五十一「中冷館集小叙」）○惠山之泉、「惠山天下第一泉」（宋・方逢辰『蛟峰文集』卷八「茶具一贊鮮于伯機」）○冲和、「万物負陰而抱陽、冲氣以為和」（『老子』第四十二章）○鷲峰、釈迦説法の地。インド中央部にあつたマガタ国の都ラージャグリハ近郊の小高い山。「鷲峰音就、或名靈鷲、或名鷲頭、或名鷲臺、皆隨俗言耳」（『一切經音義』卷第十二）○嵩少、嵩山少林寺のこと。「止嵩山少林寺終日壁觀」（『佛祖統紀』卷二十九、達磨禪宗）○燂湯、「五日期燂湯請浴」（『禮記』内則）「燂詳廉反、温也」（同前、「經典釋文」）○飲谷、「高祖」辟炳為主簿不起、問其故。答曰棲丘飲谷、三十餘年」（『宋書』隱逸傳、宗炳）

八

わたしは天地を自然の公であると信じ、自らの心を東西を同じくすると信じる。同は自ら異を生じ、異は同に帰す。つまり

異は即ち同なのだ。これが「大同」を知るということである。「專」はすすんで「同」になろうとしないが、「全」は「大同」になろうとせずにはいられない。実が虚になり、虚が実になるように、虚実有無が不二であるのは、陰陽がほんらい不二あるのと似ている。みなその初めを失わず、みな生の累わづらひに苦しまないのだ。「周易」の「始を原もとね終わりに反かえる」とは、即ち「仏典にいう」過去・現在・未来の「三世」であり、「周易」にいう「神道に権を設ける」や「仏典にいう」「迦延「地獄」の典主」は最も人の教化を輔ける。人の教化がここに入れば、神妙なる『春秋』の権によつて「この道を」闢ひらく段階にすすむことができる。孔子がまた生まれきたら、必ず老子を「龍」としたように仏をたとえ、仏が中国に入れば、必ず孔子の書を読むことを喜ぶだろう。これは私の信じる所である。「天何をか言わんや」「と無言を欲した孔子による經書」の刪定は、即ち「禪の」「不立文字」「という教えがありながら書かれた」「燈録」であり、「三藏に曾て一字を説かず」といわれるが、「華嚴の」四十二字は、華文と梵文を通ずる「芸げいに遊ぶ」の門である。不生「の始め」を笑い、ひとたび玄黄てんちが未だ判わかれぬ以前に帰れば、何が東で何が西だろう。何が半字はんじと満字まんじ、籀書しゆうしよと隸書れいしよのちがいであろうか。

【原文】愚故以天地信自然之公、以自心信東西之同、同自生異、異歸于同、即異即同、是知大同、專者雖不肯同、而全者不可不以同世爲任。或虛其實、或實其虛、虛實有無之不二、猶陰陽之

本不二也、皆以不失其初而已、皆以不爲生累而已、原始反終、即三世也、神道設權、迦延典主、最能輔教、入人之化若此、不留之以神春秋之權而闢之乎、孔子復生、必以老子之龍予佛、佛入中國、必喜讀孔子之書、此吾之所信也、天何言而刪定、即是不立文字之燈錄、三藏不曾說一字、而四十二字通華梵遊藝之門、呵呵不生、一歸玄黃未判以前、則又何東何西、何半滿籀隸之異而同而異乎、

【注釈】○神道設權、「聖人以神道設教、而天下服矣」(『周易』觀卦象傳)○原始反終、「原始反終、故知死生之說」(『周易』繫辭上)○迦延典主、十八地獄の第一地獄を指す(『法苑珠林』卷十二所引「地獄經」)○老子之龍、「孔子去謂弟子曰(中略)吾今日見老子、其猶龍邪」(『史記』老子韓非列傳)○四十二字、華嚴經に見える四十二種の梵字のこと。不空『大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門』に詳しい。○遊藝、「志於道、據於德、依於仁、遊於藝。」(『論語』述而)○半滿、半字と滿字のこと。諸説あるがここでは小乗と大乘とする。「是故半字於諸經書記論文章而爲根本、又半字義皆是煩惱言說之本、故名半字、滿字者乃是一切善法言說之根本也」(曇無讖「譯」『大般涅槃經』卷第八)、「又分半滿之教、小乘爲半、大乘爲滿、又三乘爲半、一乘爲滿、如涅槃經明半字及滿字等、說半字故、半字即顯、滿字即隱、今日說滿字者、滿字即顯、半字即隱」(五代・延壽『宗鏡錄』卷第三十五)○籀隸、籀は周宣王の時に史籀が作った書体、大篆を指し、隸は隸書を指す。(『晉書』卷三十六)

九

何何氏に信を拓げる密訣がある。曰く「小中に大を見、大中に小を見れば、古今撮粟に、豪乾蓬島。虚中に実を見て、実中に虚を見れば、蜃樓山市に、龍女の施珠。長中に短を見、短中に長を見れば、鏤丸一斛に墓誌黄梁の夢。此の中に彼を見、彼の中に此を見れば、八鏡にて魂を奪い、手もて圧して鬼を嚇かす。本より大小なければ、善巧に煩わず。本より虚実なければ、眞一に息わんとせず。本より短長なければ、何に郷うを知らず。本より彼此なければ、大公は己による。大いに大小に随えば、誰ぞ昏と暁を割けん。大いに虚実を随えば、空山は寂歴たり。大いに短長に随えば、節節に芬芳あり。大いに彼此に随えば、九州は郷里なり」と。

まさに「大いに随う」とは即ち「本より無し」であり、「見る」とは即ち「見る無し」であり、至る所に河図洛書があると分るので。「天に官して善を継ぐ」、「蕩平の枢」、「一統を大ぶ」、「春王」「如如」など、「大密」というものは、即ち天下万世こそが「密」なのである。

【原文】何何氏有擴信之密訣曰、小中見大、大中見小、古今撮粟、豪乾蓬島、虚中見實、實中見虚、蜃樓山市、龍女施珠、長中見短、短中見長、鏤丸一斛、墓誌黄梁、此中見彼、彼中見此、八鏡奪魂、手壓嚇鬼、本無大小、不煩善巧、本無虚實、不息眞一、本無短長、莫知何郷、本無彼此、大公由己、大隨大小、誰割昏

曉、大隨虛實、空山寂歷、大隨短長、節節芬芳、大隨彼此、九州鄉里。

當知大隨即是本無、見即無見、在在圖書、官天繼善、蕩平之樞、正大一統、春王如如、曰大密者、即天下萬世是密也、

【注釈】○撮粟、「量之所起、起于粟、六粟為一圭、十圭為撮」（『孫子算經』卷上）○龍女施珠、「爾時龍女、有一寶珠、價直三千大千世界、持以上佛。佛即受之。」（『妙法蓮華經』提婆達多品第十二）○鏤丸一斛、「鏤丸極數即半斛耳」（『東西均』三徵）、「斛は、「いびぎ」を指す。○黄梁、黄梁夢を指す（唐・沈既濟『枕中記』）○官天繼善、「一陰一陽之謂道、繼之者善也」（『周易』繫辭上）○蕩平之樞、「聖化所綏、萬里草偃、方蕩平華夏、總一大猷」（『三國志』陸遜傳）○正大一統、「何言乎王正月、大一統也」（『春秋公羊傳』隱公元年）○春王、「元年春王正月、元年者何、君之始年也、春者何歲之始也、王者孰謂、謂文王也」（『春秋公羊傳』隱公元年）○如如、「如如者、俗如即真如、真如即俗如、真俗二如、無別異故」（真諦「譯」『佛性論』卷三、辯相分第四）

（拡信篇、終）